

## 竹の生命／漆の気 亀甲竹

私と竹芸との関りは10歳のときからですが、竹と漆を素材とした造形の仕事を始めてからは30年になります。

使用する竹の種類は大半が苦竹ですが、孟宗竹が変異した亀甲竹もよく用います。

今の仕事を始めた当初には、癖のあるこの亀甲竹に触れることさえ抵抗がありました。ところがあるとき、京都の竹材店の倉庫でこの竹が立ち並ぶ景観を見上げ、ふっと亀甲竹を料理してみようという意欲が興り、初めて作品化したのが1999年のことでした。

節を整え癖のある部分を極力削り落とし、シンプルに見せながらできあがった第一作は、思っていた以上の迫力が出て彫刻的な強さを一層現わすことができ、私にとっては会心の一作となりました。しかし残念ながらその発表は日本では不評に終わりました。

2・3年後、その作品をドイツ人のコレクターであるクラウス・F・ナウマン氏にお見せしたところ、直感的に気に入って下さり、コレクションに加えて頂きました。

後日知ったことですが、欧米人はこの竹が大好きだそうで、その後たびたび欧米での個展において大いに好評を博しました。

この度、小西哲哉氏から亀甲竹ばかりの作品で池田巖展を開きたいという強い要望があった時は、大いに嬉しく思いました。その喜びの勢い余ってか、高さ1メートル30センチに及ぶ大作を半年がかりでまとめることができました。

今個展はこの作品を中心に据えての発表ですが、その反響が楽しみです。

私が最も大切にしていることはオリジナリティーです。作家は、周囲より一歩でも半歩でも前を進まなければなりません。迎合しながら仕事をしては御仕舞です。このように作家精神を貫くことは喜寿を過ぎた自分には、少しずつ大変になってきているのも事実。それでも、せめてあと10年は突き進みたいと思うこの頃です。

池田巖